

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

個人研究

2024年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職名	氏名
	文学部・教授	坂本貴志
研究課題	<世界知>の展開について -ゴットホルト・エーフライム・レッシングの場合	
研究期間	2024年度	
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 1,000,000円 / (採択金額) 1,000,000円	
研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと。)		
当該研究の研究目的を含むこと。 【以下、報告書全体について】 他の研究分野の委員が評価することも想定し、わかりやすく記載すること。		
<p> <世界知 Weltweisheit>とは、普遍的原理の構築の元、自然史と人類史とを包括的に捉えようとして、十七世紀のヨーロッパに始まった知的運動であり、この運動の分析と探究とを本研究者は、2021年に刊行した『<世界知>の劇場』を中間報告として、なお継続しようとしている。理性の力が万物を切り分けその様相を体系的に記述しようとする時代に、それまでの自然史(=万物の生成とその様相とを、一元的な博物学として記述しようとする)と普遍史(=聖書にもとづき、啓示が地球世界で遍く一元的に展開したとする歴史観)とが互いにかんして整合性を担保しようとし、いかに変容したかを探究することがこれまでの本研究者の関心である。ドイツ語圏を焦点として、バロックから啓蒙主義期までの<世界知>の展開を見る上で、ゲーテが仰ぎ見た知的巨人ゴットホルト・エーフライム・レッシング(1729-1781年)のこの<世界知>に対する立場を探究するのが、本年度に手がけた研究テーマである。研究目的は、 </p> <ol style="list-style-type: none"> ① 宗教的寛容と理性の自律について、世界知者としてのレッシングの議論の全容を詳らかにすること ② <世界知>とレッシングとの連関を明らかにすること <p>である。</p>		

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[世界知] [博物学] [レッシング]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか (できなかったのか)。
- ・何をもちて研究成果 (経過) を達成できた (できなかった) と考えられるのか
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。
- ・どのような点において、当該研究分野の学術研究推進の高度化に寄与できたのか。

①についての研究に基づく結論：レッシングの宗教的寛容は晩年の著作『賢者ナータン』(1779年)の中で寓意されるが、その核心は、遺作『人類の教育』(1780年)のモットー(＝アウグスティヌスの言葉「すべて既成の啓示宗教はしたがってどれも同じように真であり、また同じように偽である。」*Haec omnia inde esse in quibusdam vera, unde in quibusdam falsa sunt.*)によって表現される。このモットーは、啓示宗教はすべてひとつの寓話であり、道徳的真理(＝この内容は理性によって普遍的に承認される)を含み、歴史的事実を交えて構成された(フィクション)と解される。この結論は、レッシングの場合、主として二つの手続きを経て生涯をかけて準備される。ひとつには、ユダヤ教カバラの観点を保持しつつ、聖書を理性的に読むという、スピノザの受容であり(⇒『神の外にある事物の現実性について』1763年)、もうひとつは、イスラーム教への、ルネサンス期イタリアの世界知者ジローラモ・カルダーノを経由した接近(⇒『カルダーノ擁護』1754年)である。レッシングにおけるスピノザの受容は、ひとつには神への信仰と、現実世界の理性的了解というレッシングの信念の視座(これを「ヘン・カイ・パン」ないしは「神則自然」と表現できる)を生み、イスラームに対する理解は、三大啓示宗教が、いずれも真であり、かつまた偽で有り得るとするレッシングの視座を確立した。この二つの準備を経て、ハンブルクの牧師ヨーハン・メルヒオール・ゲーツェを相手とした神学論争が行われた。論争の前提となるハンブルクの高校教授ヘルマン・ザームエル・ライマールスの理神論的聖書批判のテクスト、これを公表したレッシングに対するゲーツェの批判、そしてレッシングのゲーツェに対する反論を分析した結果、ゲーツェの聖書崇拜はルター派教会の制度的自己保存の欲求に基づく一方、啓示宗教を寓話として理性的に捉えようとするレッシングの姿勢は、『寓話』(1778年)を通してとりわけ明確に打ち出されると認識された。啓示宗教と聖書が、道徳を引き出すための寓話であるとするレッシングの結論は戯曲『賢者ナータン』の中にあらためて寓意される。そこでは三大啓示宗教の競争的進化が説かれるが、それは信仰と理性との完全なる協働と、互いの性の所有に基づく家族関係の解消とを、歴史の完成段階(＝ユートピア＝フィオレのヨアキムに由来する千年王国の理念)に見ている。ここで性の所有関係の解消は、同時に私有財産の放棄を意味している。遠いユートピアへと向けた歴史の時間の中に我々の現在があるとすれば、所有関係の解消を目指す努力が、啓示宗教の間にある対立を解消する努力と重なるという、共産主義の結論がレッシングからは導かれることになる。資本主義が啓示宗教の説いた道徳的内実を破壊し尽くそうし、三大啓示宗教の対立が先鋭化する現代は、レッシングの説いた寓話の結論のちょうど対極にある。その結論は対極にあるがゆえにこの現代においてはほとんど無力であるかに見えるが、今日の我々の世界が抱える困難を解消するためのひとつの方向性を、対極の側にあって明示している。

②についての研究に基づく結論：<世界知>の中に啓示宗教を項目として含めるならば、人間のもつ文化と歴史との展開の中で、それぞれの啓示宗教の発展の必然的歴史とその終局の様相とをレッシングは明確に提示したと言える。その意味では<世界知>は、レッシングによって、その歴史的展開の極めて重要な様相をあらたに詳らかにされたということが出来る。だが一方で、拙著『<世界知>の劇場』で示したように、自然史を含めた万物を統合的に記述するひとつの普遍的原理の探究は、<世界知>に対するレッシングの姿勢の中では希薄であり、それという原理として取り出すことが困難であることが判明した。レッシングの知的態度の特徴は、彼の卓越した古代言語(ギリシャ語およびラテン語)への理解を基に、古典的文化芸術を成立させた原理それぞれの(＝それは決して統合的である必要はない)批判とそれらの新たなる受容の可能性の探究にあったと言える。一言で言えば、古典古代の、そして宗教を含む文化的遺産の、古代語にもとづく批判的受容の試みがレッシングの知的営為の特徴であり、それは体系性を指さない、というものである。古典古代の文化的遺産に対するレッシングの眼差しは、文学の可能性、とりわけ、演劇芸術の本質的理解へと向けられる。そしてレッシングの結論は、バロック期における悲劇 *Tragödie* は王侯貴族を、喜劇 *Komödie* は庶民ないしは市民を対象として成立させるという、マルティン・オーピッツの古典主義的議論を刷新し、市民もまた悲劇芸術の主題となる、というものであった。レッシングは自ら「市民悲劇 *Bürgerliches Trauerspiel*」を創作して実地にその可能性を探究して見せたが、ここで浮上した研究上の問いは、果たして悲劇 *Tragödie* は「悲しみ」を主題とするものであるのか、という古くて新しい、芸術論の主題である。

研究成果の概要 (つづき)

レッシングは『ハンブルク芸術論』(1767年)で、「悲劇」の特徴を、「怖れ」と「同情」であるとアリストテレスに依拠して定義し、「悲劇」が「感情」の表現を目標とするとして、あらたに近代ドイツ語の世界に悲劇論を構築しようとした。では、この「感情」の表現をもつばらとすべき近代「悲劇」は、バロック期の「悲劇」と比較して、いかなる革新性をもったのか、という問いが、研究遂行上に新たに、決定的に浮上した。かつてヴァルター・ベンヤミンも、バロック期の「悲劇」の分析と向き合い、市民社会を経た「悲劇」芸術の変容を追求した。が、その際のベンヤミンに欠けていたのは、ドイツ語圏の王侯貴族のオペラの包括的分析、という視点である。オペラは、イタリアの十六世紀末より、古典古代の知的遺産の文献学的受容と再生の試みの中で、ギリシア「悲劇」を再生する試みの中で誕生した。オペラは、ヨーロッパの各国近代諸語によって古典古代の材料を主題として競争的に創作され、ヨーロッパ中の宮廷にて上演された。古代神話と古代の歴史とを題材とした、バロック期の宮廷オペラは、そもそも「悲劇」的な何を表現することを目的としたのか？バロック期の宮廷オペラは、汎ヨーロッパ的広がりをもつが、ドイツ語圏宮廷オペラの諸特徴は何か？こうしたドイツ語圏宮廷オペラの諸特徴の記述の上に、レッシングの近代市民「悲劇」の本質もまた了解されるだろう。なぜならレッシングもまた、最終的にはブラウンシュヴァイク侯の廷臣として演劇表現を行ったからである。市民悲劇から宮廷オペラへの遡及という、新しい問いの観点が、研究遂行上発見されたことが、今回の研究の大きな成果である。そしてこの成果をより根本的に究明するためには、ドイツ語圏宮廷オペラと他の言語圏の宮廷オペラとの比較、とりわけ、バロック期のドイツ語圏の、大小さまざまな宮廷が影響を受けた、ルイ十四世の宮廷オペラならびに、これと関係する宮廷のスペクタクルの様相の分析が不可欠であるとの認識に至った。それゆえ、ルイ十四世の文化イベントに関する研究を行い、さまざまな資料を分析した。その過程で、資料の舞台となる、ヴェルサイユ宮殿およびチュイルリー宮殿跡地の調査を行った。また、バロック文化の前提となるルネサンス文化の、イタリアとは異なるルーツをかつてのブルゴーニュ公国の諸地域に求めて博物学的調査を行い、〈世界知〉との接合性を検討した。宮廷オペラから市民「悲劇」への移行の中で輪郭を帯びることになるスペクタクルの新しい性格にこそ、近代ドイツにおいて〈世界知〉を変容させつつ再編させる認識の原理が隠されているはずであり、今後の研究はこの点に焦点を置くことになる。

なお、本研究成果は書物による公表を行うものとして経費の申請を行った。2024年度内には上記①についての部分の執筆を行ったが、②については、新しい視座を得て研究範囲が大きくは拡張されたため、未だ完成していない。そのため、研究成果の公表は2025年度以降となり、この公表によって「当該研究分野の学術研究推進の高度化」への寄与がなされることになる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

なし